

ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十三号

令和六年十月一日発行

目次

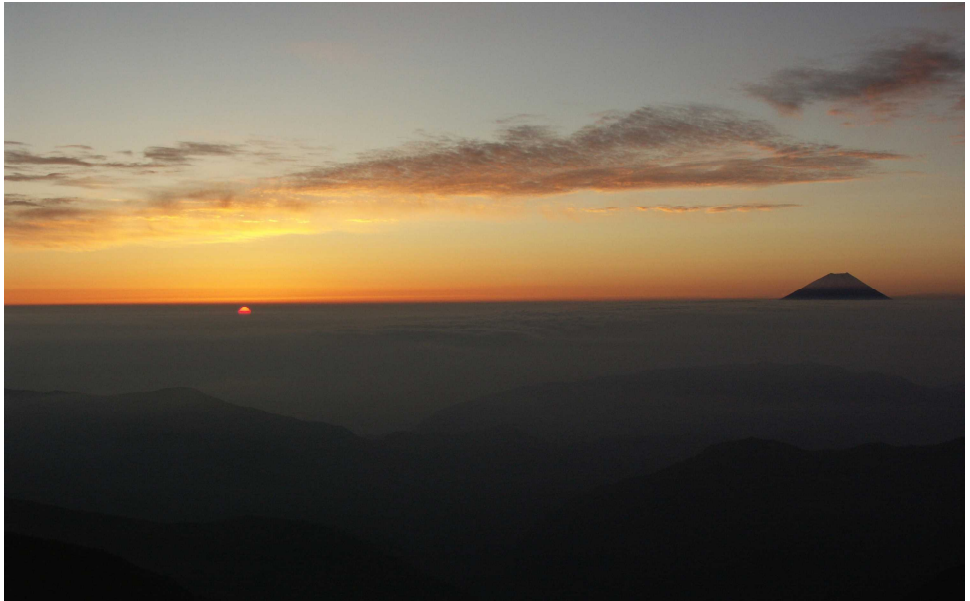
『あしかび』 第六号	和田重正
生きるとは選択である	
風呂の順	
『あしかび』 第七号	和田重正
「思い」切る	
貧乏人幸福論	
まな字 昭和四十八年九月号	和田重正
白い杖 迷信	
やまのり 奇石	
まな字 昭和四十八年十月号	和田重正
白い杖 野心と願い	
やま 10 野性味	
不安の中の自己発見 まな字学苑合宿感懐文	
中山真知子 稲田 健 伊藤 恵子	
鈴木 康明 大野ユキコ 西谷 行雄	
後記	

表紙写真 一光

農鳥岳・北岳の稜線より

静岡県静岡市葵区小河内

撮影 平澤正義





6

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年六月

日曜の話 六月二十六日

生きるとは選択である

私がいつも話すことは、二十年も三十年も苦心したあげく、これで間違いなしと、確信を得たことばかりですが、みんなのようなきれいな心で聞いてくればすぐにわかる、やさしいことが多いのです。今話すことも理屈をこねればむずかしいことだが、素直に聞けばすぐ肯けることだと思います。

人間が生きて行く道は一筋しかない。あの時もし映画へ行かなかつたら、もっといい成績がとれただろう、というようなことをよく人は考えたり言ったりします。しかしそんなものなんていうことは絶対

あり得ません。一度あってしまったことは取り消すこともやり直すこともできない。もしということはただ頭の中で勝手に描いた夢のようなもので、全然事実ではありません。

これから先のことと同様です。われわれがある時に実際にするのはただ一つです。からだが一つしかないのだから、どうにもなりません。今日の午後六時に東京に居ると小田原に居るのとを両方実行することはできません。歩くのと走るのとを同時にはいできないし、眠るのと働くのとは一緒にはできません。これほど当たり前のことはありません。しかしこれがこれから言おうとすることの大事な基礎なのです。つまり生きるということとは、多くのしたいことの中からただ一つだけとって、他を全部捨てるということの連続だということと言おうとしているのです。

今日は久しぶりのお天気の良い日曜日だから、みんなはいろいろなことがしたいでしょう。今朝ごはんを食べながらどんなことを考えた？「山へ行きた

い、海へも行きたい、川へ鮎をつりに行きたい、田植のお手伝いもしたい、試験までには間があるから涼しいところでゆっくり小説でも読みたい……。しかし日曜の話聞きなんぞをしに塾へ行くのもサボれない」というわけでここに来たのだとすると、いくつもの、したいことを全部すて、なんぞだけをする事になったわけです。

ちよっと考えると、これから自分のすることはいくつもあるような気がします。道がいくつにも分かれてるように思えます。そして自分はそのどれをも通ることができるよう、なんとなく思っていることが多いのです。ところが本当に自分の通る道はただ一つそしてその道を一度選んだらもうやり直しはできません。だからどの道をとるかを決めるということは大へんなことなのです。

実際にわれわれが一分一分、一秒一秒、自分のすることを決めていくわけです。一心に話を聞こうか、隣の人をつつこうかと。

ところが自分の行動を決めるのに一々理屈を考え

ているわけではありません。理屈を考えて決めたように思っても、実際は理屈は後からつけたものなのです。では何によって決めるのかというと——その決めるものが人間の智恵というものなのです。智恵の磨かれていく人は少しも迷わず、スカッスカッと正しく自分の行動を決めて行くから大へん能率がいい。智恵の暗いものは年中マゴマゴしたり、迷わなくてもバカなことばかりして結局何をしたのかわからないような、ロクでもない一生を過してしまいます。この智恵というのはあたまのよさでもないし、むろん知識のことでもない、もつともつと重宝なものです。そんな大事な智恵を磨く練習場としてこの塾が開かれているのです。

そこでちよっと変わった話をしよう。これは本当の話か誰かの夢物語か知らないが、でも全然でたらめな話でもないと思います。——人間が死ぬと霊界というところへ行くのだそうです。まあ幽霊ばかりの住んでいるところだと思えばいい。そこへ行ってみると、地面にへばりついてうごめいているドス黒く

赤いから段々上に行くに従って赤紫、濃紺、青色になり、その上はすばらしい銀色から黄金色に輝いているのだそうです。これは智恵の輝きの順です。

つまり下等な人間ほど低いところにいるのだそうです。一番下のドス黒いやつはケチで欲張りでももの道理がわからず、この世に五十年も七十年も生きていたのに智恵が少しも磨かれなかったので、魂が少しも進化せず、相変わらず金や品物や見栄や愛欲に飢え、憎しみや恐れや苦しみに満たされているいわゆる地獄にいる人たちです。一番上の金色に輝いているのはお釈迦様のように最高の智恵を磨き出した高級な人たちです。

どうして、こんな差ができるのかというと、要するにこの前にいった自業自得なのです。智恵の暗いものは、本当に自分の身になることがわからず、自分を穢し、苦しめるような悪いことばかりに興味がもててしまう。智恵が少し磨かれるに従って、何が自分を成長させるかということが段々わかってくる

のです。そうするとだんだんケチな根性が少なくなつて色も次第に変わってくるという具合です。

これは死んだ人の話だから本当かウソか知りませんが私のように三十年以上も人間の値打ということばかり気にして考えてきた人間は、生きている人を見ると、目に見えるわけではないが、心にはなんとなくその人の色が感じられるように思います。だから私は決して人からだまされません。大臣や博士や大金持や色の白い美人などでも、臭いようなドス黒い人もあふし、歯の抜けた長屋のおばあさんやまっ黒な顔をした会社の小使いさんにも美しい青い人もいます。おかしいことには、位が高く威張っている宗教家の中にも大へんきたない下等な色をした人がたくさんいます。

さて余計な話になってしまいましたが一筋しか自分の通る道はないのですから、本当に自分の利益になるような道を選ばなければ損であります。そのためにはなんとかして本当の智恵を磨かなければなりません。

今日の話は、みんなには直接役に立たないかも知れないから、最後に一つだけ実用向きのお話を付け加えましょう。明日は試験だ、こんどこそ頑張ってお先日の失敗を取り返さなければと張り切って机に向かったところへ「雨がひどく降ってきたから学校までK坊に傘を持って行ってあげなさい」とお母さんに言われたとします。どうするのが自分に一番利益だろうか。「OK」と言ってお母さんに傘を持って飛び出すのが最上です。そのわけは詳しく説明する必要もないでしょうが「そんなことしたら勉強ができない」と思うのは間違いです。心の中で傘と勉強とお母さんの顔が取っ組み合いをしていたのではいくら形は勉強していてもロクな勉強にはなりません。勉強は後から取り返すことができます。傘は今持っていないと役立たない。だから一度あつさり勉強を捨てて傘の方を片付けてしまえば、結局二つともよいこと（善業）をすることができます。ブツブツ言うのはマイナス（悪業）だから、せっかく傘を持って行ってもそれは帳消しになってしまいま

す。この調子でやっていったらいくら生きても自分という人間の成長にはなりません。パッパッと気前よく捨てて、今しなければならぬことだけに全力を打込んでいけば人間がどんどん進歩・成長するし、一度捨てたことも次にやれるかも知れません。

漫画を見たい、勉強をしなければならぬ、そのときはどっちかを気前よく捨てればよい。だが勉強を捨てて漫画をとるか、漫画を捨てて勉強をとるかはその人の智恵の程度によって決まります。そしてその選び方によってまた、その人の智恵の進歩のし方も違ってくるわけです。昔、高等学校の生徒はデカンショという歌を好んで歌いました。その一つに「めしは食いたし、朝寝はしたしコリヤコリヤ、めしと朝寝の板はさみ、ヨイヨイ、デッカカンショ」というのがありました。そしてめしを食ってみんな成長したものです。きたならしい赤い人間になってはたまりません。智恵を磨いて、よい選択を続けて美しく澄んだ人になりましょう。

風呂の順

これもこの前の父母の会とき話したことですが、うちでは風呂に入る順番は人によって決まっていなくて、そのとき都合のいい人から順に入ることになっています。そう決めたわけではありませんが、自然にそうなっているのです。これは、一番みんなに都合がよいのですから、一番合理的で実際的であります。ですからこの順番については誰も疑問を抱いていないようです。

ところが実は明治生まれの私だけは内心、どうも面白くないのです。仕事の都合で大い私が一番後から入ることになるので、その度にフト安らかでない気持ちに襲われるのです。「一家の主人が」といったようなものです。そこで私はよく、自分が一番先に入るべきだという理由を見出そうとして、いろいろ

無意識のうちに工夫しているのです。少なくともお風呂が沸いたら先ず自分にすすめてくれて、私がある第一順位を抛棄ほうきしたらば次の者が入る、というふうにでもできたら自分の感情は満足するのだが、と思ってみたりするのです。

根本はそうするのが礼儀であり秩序というものだと言いたいのです。そして子どもたちにもそのような躰しつけをしなければならぬ、と思いたいのです。ところがいくら屁理屈をつけてみてもそういう礼儀や秩序が今日の社会でも必要であるという理由は見出せないのです。そういう礼儀は全く封建社会を維持するためにのみ必要であったとしか考えられません。これは社会的要求でなく、ただ私の習慣的感情、要求に過ぎないようです。

それで私は今まで我慢して一言もそれについて言たこともなかったのです。これからも言わないつもりです。しかし、これほどよく理屈はわかっていながら感情というものはどうにもたらないものです。私は明治四十年生まれですが、三十年台に生まれた

人たちはもっとひどいのではないかと思えます。もしそうだとしたらこれに類似のどうにもならない感情のズレがいくらも日常生活の中にあるのでしよう。

その感情は馬鹿らしいものに違いませんが、その明治人にとつては案外重大なことなのですから、若い人たちは、そのために何か非常な差し障りがあるなら別ですが、そうでなければ、あまり馬鹿にしないで一種の骨董品のつもりでもっといたわってあげるのが正しい人情というものでしょう。

それと同時に明治人の側でも、時代に合わない不合理な習慣的な感情を無反省に持ち続けていはいはしないかと検討してみる必要も大いにあると思えます。

さて、私が言おうとする本当のことは、実はこれから先なのです。

昔のような封建制度を守る必要のために定められた礼儀とか道徳は、今の社会では必要でないばかりか、生活を明るく能率的にする妨げにもなります。ですからなるべく早く打ち破ってしまわねばなりません。しかし、うっかりすると、そつうのとは違

って、今日でも社会生活を楽しく明るくしていくために実質的に役立つことまで一緒くたに棄ててしまふことになりがちです。

例えば先の風呂の話で言うと、お客さんに一番新しい風呂をすすめるのは決して虚礼ではありません。他家の風呂に入るのによこれては、とても気持が悪くてやり切れません。お客さんに先に入ってもらうのは、必ずしもお客さんが偉いからではなく、不愉快な思いをさせないためなのですから、そつするのは無意味ではありません。ですから「一家の主人」と共にお客さんまで入浴順位を廃してしまつては行き過ぎと言わねばならないでしょう。

だいたい「人間は平等である」「人の上に人を作らず」などという民主主義の原則は、人間の基本的人権について言っているので、後天的に獲得された「実力」の差を認めないというのではありません。十円持つて料理屋へ行った人が千円持つて御馳走を食へている人と同じ物を食へさせろ、と言つたつてそれは無理です。試験の問題が一題しかできない人と五

題共できた人と同じ点をつけると言っでは無茶です。有力者の子だから一題できても100点をつけて高等学校に入れるというのでは、かえって平等な人権を認めていないことになります。それと同じように親や先生は子どもよりいろいろな面で多くの「実力」を持っているのが普通です。その「実力」の差を認めたら自然それ相当の尊敬の念を抱き、それにふさわしい態度や言葉使いが出てくるはずであります。

私は何も形の上で親や先生などに礼をつくせと強制したくはありませんが、「実力の差」を知って、それに尊敬の念を持たせるように教育することは、ぜひとも必要だと思ふのです。そのような謙虚な気持は誰にでも必要ですが、ことに青少年には大切なことだと思ひます。それでなければ教育の成果をあげることができません。ところが戦後の学校では、ミソクソ平等観に執われた調子のいい先生たちが、勢を得て、このように厳然と現実存在する差別を無視し、謙虚な気持を殊更に破壊するような教育が支

配して、指導力・感化力・教育力を自ら失ってしまいました。その結果が端的にあらわれているのが、子どもたちの先生や親に対する乱暴なげやりな言葉使いや態度です。そしてわけもわからずに思い上がって親も先生も眼中に置かず、勝手なことをして自分自身を害い、世の中に害毒を流すことになりました。今日の青少年の現状を御覧になれば思い半に過ぎるものがあります。

観念的平等に執われて現実の事実を無視しては、確かな教育ができるはずはありません。何が平等で何が差別かがあるのままに認め、その事実の上に正しく据えられた心構えができなければ教育をすることも、されることもできませんし、個人も社会も幸福を手に入れることはできません。

◇行事と案内◇

○ 仏教会 七月二十四日 東泉院にて

講師 内山興正師



7

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年七月

日曜の話 七月三日

「思い」切る

昔、陸軍の下士官を養成する学校で戸山学校というのが東京にありました。その学校の校長さんの菱荊中将（後に大将になった）という人の息子さんが、中学時代、私たちと友だちだったので、私たちは、中学二、三年頃には、学校の帰りに毎日そこへ寄って遊んだものでした。この学校の中は東京と思えぬように木の茂みなどがあって雉もたくさん住んでいました。それに訓練用のいろいろな設備ができていて、われわれにとってはこの上ない楽しい遊び場でした。高さ一間半くらいの石崖があって、それへ靴

のままでもよじ登る練習をするのですが、これが案外面白い遊びでした。兵隊は重い背囊（はいのう）（ランドセル）を背負い、銃の先に剣をつけたものを握って、この石崖に向かって突撃し、これによじ登るのだから、なかなか大へんなことなのです。その他、剣道、柔道、銃剣術の道場はあるし、あらゆる体操の道具がととのっています。

その中であれは何といったかはつきり覚えがないうのですが、「りょう木」といったような気もしますが、なんでも二間半（約四・五メートル）も高いところに幅二十五センチぐらい、長さ十メートルぐらいの木がよこたわっていて、その上を両手を水平にのばして静かに渡る練習をするものがありました。私はそれで遊ぶのが大好きでした。その時分から私は倒立がうまかったので、その上を端から端まで倒立で渡って軍人たちによくほめられたものでした。

ところがその上に足で立って下を見るととてもこわい。ましてその上から飛び降りるのはずいぶん思い切らなければできないことでした。はじめて飛び

降りたときは姿勢が崩れて、ひどく尻餅をついて痛い目をしましたが、二度目からはうまく降りられるようになりました。最初のときは、飛び降りて空中にいる間——かなり長い時間に感ずるのですが——気が変になっていたのでしよう。だから降りたというより半分落ちたようなものなのです。二度目からは、足を離してから地上につくまで正気でいられたので安全な姿勢が保たれたのだらうと思います。どんな場合にも正気を失わないでいることが如何に大切なことであるかを、そのときつくづく知ったのですが、今みんなに話そうと思つのは、そのことではなく「思ひ切る」ということです。

私は生来臆病おくびょうなたちで、小さい子どもの頃から大人になるまで、なぐり合ひの喧嘩をして負けたことがないほどです（臆病だから、やられないうちにこっちから手を出してやつつけておいて逃げてしまふことになる）。そのくらいだから、りょう木のそんな高いところから飛び降りることは、なかなかできませんでした。五、六人の友だちの中で、飛び降り

られないのは私一人になってしまったので、とうとうあるとき半分落ちるようになって降りたわけなのです。そのときの気持を今でもよく覚えています。それまで高いところに立つと、どうして飛ばうか、と千々に心を碎き、思い悩んだ末、結局自分の心をとのえることができなくてやめてしまふのが常でした。そしてついに飛んだときはどうだったでしょうか。飛び方や、降り方にこうすればよいという結論が出て安心して飛んだのではないのです。迷い迷いしている真つ最中に、フト思いが切れたのです。「思ひ切る」とは文字通り思いが断ち切れることです。私はその時、「ハハハ、さうか」と思いました。これと同じ気持を、はじめて大車輪をしたときにも経験しました。それらの体験がその後の私にどんなに役に立つたか知れません。

試験勉強をもうはじめなければいけないと思ひながら、なかなか手がつけられないことがあります。こんなことでは間に合わなくなる、どうしたらできるだらう。断髪でもするとか、部屋の掃除でもして

サッパリしたらいいと思ったり、正座をして心を落ち着けようと思ったり、思い切って映画でも見るとか山へ行くとかすれば落ち着けるだろうとか、家の人がうるさいからそれをなんとか処置しなければだめだとか、いろいろなことを思ってみます。そしてやってみるが思うようにはならない。ますますイラ立ってくる。こういうことは誰でもよく経験することだとみえて、学生はよく

「どうしたらよいでしょう」

と、相談に來ます。私は必ず、

「どうもこうもあるもんか、やればいい」

と答えます。それより答えようがないのです。

勉強ばかりではありません。気持ちの持ちようで解決のつくことだったら何でも同じです。私がタバコをやめたのもこの要領なのです。十四の時から四十七歳くらいまで、絶え間なく喫っていたタバコをやめたのは、私にはとても貴重な経験でした。それまでタバコはからだに悪いし、お金も損だから断然やめようと思って、ずいぶんいろいろな苦心をしま

したが、どうしてもやまりません。ところが本当にやめたときは何も苦心をしないで「ただやめただけだったのです。仁丹をかんでみたり、罰金制を作ったり、指を切る誓いをしたり、知友に禁煙の宣言文を送ったりしている間はどうしてもやめられませんが、要するにやめればやんでいるのです。みんなも、もし何か自分に悪い癖くせがあつて、困っている人があつたら、やめてごらん。そうすればきつとやまる。やめるのに方法はありません。余計なことを考えるか
らいけないのです。余計な「思い」を切ればなんでもな
い。この思いを切る手段として昔から偉い人々が
いろいろなやり方を教えていますが、実際はそれも
おかしいことです。思いを切る方法などあるはずが
ないのです。

ところでこの要領を知ったら、みんなのあたまのはたらきは一ぺんに五倍にも十倍にもなります。みんなのあたまの出来はだいたい似たようなものです。機械の構造は大して違わなくてきているのに、そのはたらきようはずいぶん違いがあります。何が違っ

のかというと、どれだけあたまのはたらきをしめつけているか、そのしめつけている邪魔ものの力の強さによるのです。だれでも、余計な、くだらない考えて、自分のあたまのはたらきを制限してしまっているのです。これは決してでたらめを言っているのではなく、立派な科学的根拠があって言っているのですが、そのくだらない思いを切ってしまいさえすればどんな人でもすばらしい秀才と同じになります。

私は中学四年のとき、この「思い切る」という要領を一段と深く会得したために、それまで非常に出来の悪かった勉強が急にできるようになり、飛び切りの成績をとるようになってしまったのでした。

私は、みんなにこの要領をどうかして知ってもらいたいと思っています。日曜の話の聞いたり、なんぞをしたり、合宿をしたりして、二年間絶えず私と親しく交わっていてくれれば、大ていの人は、自然にわかってくれると思います。

はじめ塾に来て、こんなことぐらい知らなかったら実につまらないことです。英語や数学を習うだけ

なら、わざわざこんな塾へ来なくてもよろしい。せっかくここへ来るなら、もっともっと一生の莫大な得になることを学ぼうと心がけてもらいたいものです。

おとなのページ

貧乏人幸福論

先日まで朝日新聞の夕刊に連載されていた『夢を失わず』という小説の中で、大塚工業の社長が社員たちに向かって「貧乏人は幸福である。おれは金持になってつくづくそう思う」というところがあります。

貧乏が人生最大の不幸だと信じている人は多いし、「貧乏は子どもの敵である」という有名なことはも否定できませんが、それとは別の観点から、私は大塚社長とともに、近頃本当に貧乏の幸福ということを痛切に想っています。むしろ、大塚社長は十何億

かの金持になっての迷懐であり、電気冷蔵庫やテレビにさえどうしても手の届かない私の現状とは比較になるわけではありませんが、貧乏をなつかしき、貧乏の貴さをしみじみと味おっているという点ではあまり違わないかも知れません。もつとも、こんなことを言えるのは、喉元過ぎて熱さを忘れたため、現在の結構なご身分のせいであることも自ら承知しています。

さて、私が近頃つくづく貧乏を貴く思う第一の理由には貧乏のときほど日常生活の中に感謝の念が多くあったということです。私の言う貧乏とは、テレビが買えないとか、子どもにオートバイを買ってやれないとかいう程度を言うのではありません。明日の朝の米をどうしようか、子どものPTA会費をどうしようかと、夫婦が口にも出さずにじっと暗闇の天井を見つめているといった程度以下の場合をいうのです。ですから、そのつらき苦しきさといったら、体験した人でなければ想像もつかないものです。この苦しみに一息でもついたら、そこからなんとか違い

上がる才覚もつくだろうに、その一息つくいとまもない、そんな息詰まる状態に呻うないているときのつらさ。それも一年や二年のうちはまだよい、五年と続くと、「もう貧乏にはあきた」と言いたくなります。

それほどの苦しみの中において何が幸福か、と人々は言うかも知れません。それでも私は、自分がそうであったときを省みて本当になつかしく思うのです。ああ、あの頃は幸福だった、と。

そして事実、私たちは、その当時にも自分たちが不幸だと感じたことは一度もありませんでした。それは当時親しくして下さった方々はよく御存じのことと思います。してみると、苦しきと不幸は必ずしも一致するものではなく、むしろ思われます。

親切な人々から子どもたちに古い洋服を恵まれ、クリスマスには大きなケーキを贈られ、時にはアンパンを持ってきて下さる人もありました。そんなとき子どもたちの喜びようといったら、全く清らかな天使の喜びでした。「あのおばさんはいい人だね」と感に堪えぬといった声を出して、その人のやさし

い心を讃嘆するのです。畑でとれた新ジャガや納豆が具えて食膳が賑わったときの子どもたちの弾んだ会話、それを見ている親の心の中に、どんな感謝の気持が溢れたことでしょうか。

お菓子や洋服を通し、その贈り主を通し、畑を通し、家内の袋貼りによって得た三十円の現金を通して、その背後の何者かに向かつて限りない信頼と感謝の念が湧いたものです。卑屈とか狡さとか、反撥とか不純なもの片鱗も止めぬ素直な喜びに親も子も浸ることができるとは、何という幸福でしょうか。

恐らくこの喜びは貧乏か絶望的な病気が、あるいはそれに匹敵するほどの苦しみに陥った経験のある人だけが知っていると思います。

今はみなさん御承知の通り、多くの人々のおかげで、私もそれほど貧乏さを感ずるなくなりました。

毎日アイスクリームを食べたり、大きい子には万年筆まで買ってやれるほどの豊かな生活をさせていただいています。実際、私は毎日一回や二回は必ず「こんなに恵まれていいのだろうか」とうしろめた

い気持になるほどです。それなのに数年前のような心に泌みるような感謝の念がめったに湧いて来なくなりました。

感謝の多少が人間の幸福の目安になるものならば（私はそれが正しい測り方の一つだと思えます）、私は物に恵まれて幸福を失いつつあると言つこともできるかも知れません。もちろん、そう簡単に割切つた言い方をするのは正しくないでしょう。苦しみが少なくなった分を勘定に入れないのでは片手落ちですが、少なくとも深い感謝の念を抱く幸福は、たしかに減少しています。我ながら浅ましい根性だと思えますが、それが事実なのです。この辺の心の変化の様子は『氾濫』（伊藤整氏）によく書かれています。境遇の変化による人間の心の移り変わりは、自分自身にくらべてみてあの通りだと思っています。さて、それならばもう一度、そういう貧乏になるように努力すればいいではないかと考えられますが、そんな気にはなれません。信心決けつじよく定して極楽往生疑いなし、と言う人でも早く死のうという努力はし

ないのと同じでしょう。

畢竟、人間というものは、このような矛盾の中にただ一つの眞實を得て安心立命に到るのでしようが、それはさておき、實際問題として、人間が貧乏したり金持になつたりするのは、そう自分の思う通りにはならないものなのです。結論として私は、より多く感謝すべきはずである状態に置かれながら、恩になれてかえつて感謝の念が乏しくなつてた自分の愚かさを日毎に感じながら、これも運命とあきらめてゐるわけです。貧乏のときは貧乏の苦しみを、これも運命とあきらめていたのと同様です。

私が貧乏人幸福論などと今さら言い出したくなつたもう一つの原因は、多くの青少年と親しくしてみて、お金持が子どもを健全に育てることは、難中の難事だということを感じてゐるからです。これを自分の問題として考えれば、自分はお金持でなくて幸せだったということになります。ですから、ここから後は貧乏幸福論でなく金持不幸論なのかも知れません。

実際にどんな素質のいい人でも普通以上に物質に恵まれて育つた人には、社会人として大きな性格的な欠陥を持つてゐる人が多くいます。頭のいい馬鹿坊ちゃんといった、付き合いくらいの人がよくありますが、飽きっぽく、次から次へと好みが変わり、ことに官能的な刺激ばかりを追つて、眞の生活意欲に欠け、おまけに排他的で独占欲が強く、非常にケチな面を持つてゐる。これは多く、幼いときから本人の自然の欲求以上に物を与えて、欲望を浅いものにしてしまったことと、他の同年輩のものに対する防衛の必要から養われた止むを得ない欠陥でしょうが、もし親がそういうことを承知して、その欠陥を防ぐことと思つていても実際上はなかなか実行しにくいものなのです。お金があるのに本当にない人の真似はできるものではありませんから。

ですから、ずいぶん賢く、育児や教育に熱心なおかあさんの子でも、ほとんど例外なく、その類の欠陥を具えているところを見ると、どうにもならないものようです。これは、まさに金持の悲哀であり

ましよう。

それではお金を儲けなければよきそんなものですが、やはりそうはいきません。そういう人の働きにはお金がついているので、働けば儲かってしまうのでしょうか。かといって、正常な人間が働かないではいられません。私は、そういう人は、これも不運とあきらめて儲けるより仕方がないと思います。そして、できるだけ公共のために使って、金毒を少なくするようにつとめるより致し方がないと思います。これは決して冗談や皮肉で言っているわけではありません。私は本気でそう思っているのです。

ただ世の中には、飢えたりPTAの会費に困ったりもしないのに、いくらでもお金を欲しがる人がいます。その人たちは何を得意でしようか。不幸の上にも不幸を積み重ねるのに努力しているとは思えません。全く「何たることか」と嘆かずにいられないのです。これが貧乏人幸福論をものしたゆえんです。

(追記) せひ欲しいと思うもの十のうち、一つか二つが

買える程度の貧乏さが、最も理想的な状態だと思います。

◇行事と案内◇ はじめ塾の本領は、合宿によって発揮されます。塾生はなるべく機会を作って、左のいずれかの合宿に参加することをすすめます。

一、定期合宿

費用 一二〇〇円 米二升五合

定員 五名

一、合宿林間学校(八月三日〜九日)

例年の通り林間学校を開設します。

場所 久野 東泉院

費用 一五〇〇円 米二升五合

寢食は各自持参 申込み 七月二十日まで

一、夏期任意合宿(暑中休暇全期間中)

この期間は塾生外の人々にも解放します。

宿泊の日数も制限がありません。日課規定に従って生活する。勉強の指導も受ける。

費用 一日、三百円 米四合

まみず

昭和四十八年
九月号

迷 信

白杖 32

より豊富な物と知識によって幸福が得られるという考えは、人類始まって以来の迷信である。また自分とは外海から区別され、孤立した生きものである。という考えも、前者に劣らぬ普遍性をもった迷信である。しかし、どんなに広く信じられても、迷信は所詮迷信である。たとえ議論で迷信が勝っても、それが正信にはならない。だが、誰が迷信と正信を判別するのか、とりコウな人は思うのではないかしら。

やま 9

奇 石

和田 重正

(小田原はじめ塾)

かなり前から噂を聞いて、是非一度行ってみたいと思っていた富士宮市(静岡県)の奇石博物館を訪れる機会を恵まれました。

一步館内に入って、私はしばらく動くことができませんでした。館内にみなぎる石の威力に打たれたのです。ひとの話によって想像していたものとは、およそ質の異なった石の集団です。恐らくひとがどんなに想像を逞しくしても、この実物に接したならば、あまり

の意外(？)さにどう思っただらよいか、心の置場をととのえるのにかかる時間を要するのではないかと思ひます。

ここは奇石博物館と称されています。なるほど奇なのです。われわれは十年ほど前の銘石ブームの経験を経ておりますので、たとえ奇石と言われてもあの銘石のイメージは消えません。

ところが奇石というのは、展示会場に色と形を誇ったあの銘石とは全く違うものなのです。選ばれる価値の尺度が違ふのです。

では奇石とは何か、とここで説明を加えなければならぬのですが、それは不可能なのです。各々が自分で実物に接してみなければ、なんとも説明の仕様がないうです。

何故かと言うと「奇ぶり」が千差万別だからなのです。いわゆる銘石展で見るとすばらしきは、例えば模様と形のすばらしさ、というように「すばらしぶり」を簡単に分類することができません。むしろ色や形の変化は細かく分ければキリがないと言えるでしょうが、それは要するに美術品的なすばらしさであり、それから受けるわれわれの感動も、その線に沿ったものだけと言えます。

ところが、この奇石博物館に集められた世界二十八ヶ国産の四百八十点の奇石は、その奇ぶりをそのような単純な標準では分けられないのです。勿論美石も奇形もありますが、それが集められた理由は必ずしも色の美や形の奇という

表面的な意味ばかりではなく、その一つ一つの成因への思いが深く秘められていることを感ずるのです。恐らくこの私設の、しかも世界一といわれるコレクションは、ただ珍しい物を集めるといふ素人蒐集家的な感覚で集められたものではないのだと思ひます。地球という生きものが百歳を寿命とするわれわれにとっては想像を絶する長さの何億年の時間をかけて自己の内部で作り上げたもの——しかも偶然に、ある時、ある場所でも筒だけというのではなく、極めて厳格な法則の適用によって(他の類との相対量としては少ないけれども)作り出されたものから受ける言い知れぬ威力のようなものがこの蒐集を行なわせたものだと思

います。

ともかく想像外のコレクションです。一つ一つに驚いているうちに、私の驚きの神経のバネが利かなくなってしまう。数回に分けて見なければとても全部を味わい尽くすことはできません。

しかし、このすばらしい博物館を紹介しようというのが、今の私の意図ではないのです。この奇石群を見て、私の受けた感動を語ってみたいのが本心なのです。

私は多くの人々と同様、植物からも動物からも強い感動を受けます。しかし、それは石から受ける感動と比べれば軽いというか浅いというか、つまり大体上半身に受ける感じです。中にはしみじみと沁み透るものもありますが、それ

でも動植物から受ける感動には重みがありません。ところが石から受けるものには威力があります。河原や海岸で見かける普通の岩や石からも腹の底に響くような感動を覚えます。

この奇石群から受ける感動も、むしろ普通の岩石から受けるものと質は同じなのですが、それが極度に純度を高め、濃縮された形で迫って来るのです。息を呑む感動、無限をバックにした無形の威力は、日常的な想念を一瞬にして追い払ってしまいます。

私はあれから、あの感動の正体は何だろうかと時々自ら問うてみます。そしてわかったことが二つあります。

一つは、あの感動は顕微鏡で未

知の微小物の形態を見たときのそれに似ていること。微小物と言っても私が見たのはせいぜい、いろいろな花の花粉や蜘蛛の糸、玉葱の細胞、蠅の目、蚊の針（口吻）ぐらいのものですが、中でも花粉を初めて見たときの、驚異と感動は、この奇石を見たときのそれに大変似ていました。

気がついたことの二つ目は、このゴマカスことのできない、のびきならない性質の感動は、これから奇石を「ああ奇石ノ！」と認めさせる理由が、意外にもその規則性にあるということから出ているということです。（ここは文脈が通りにくくなっているのもう一度ゆっくりと読み返してみてください）

この点では、宇宙船が月や火星

や金星にまで計算通りに到達することに對する驚嘆と甚だよく似ています。つまり、非生物界の單純さ、法則適用の嚴密嚴格さへの驚嘆です。氣まぐれや融通の許されない無私の営みへの驚きです。

何故このような理屈通りの営みに接して、これほど深い感動を覚えるのでしょうか。それは自分の意識する人間界では、氣の迷いや好悪によって軌道が歪められ、当然あるべき結果が出ないのに慣れ切ってしまったからではないかと思つたのです。

例えばアメリカ産の十字石というのがあります。黒褐色で正確な十字になっています。もし黙つてそれを見せられたら人々は絶対に人工的に造られた物だと思つてし

よう。それほど正確にクッキリと十字形なのです。

われわれは人間が精密に測つて作らなければこんな正確な十字は出来ない、と思ひ込んでいます。

ところが、人間のはからいや技巧を用いずとも、一定の条件がとつた時には、そのようなものが出来ないわけにはゆかないのです。だから、このような十字は偶然に一箇出来るのではなく、同種のものがともかく売りに出されるほどの数だけ出来ているのです。

更にソフトボールからバレーボールほどの大きさの艶のある真黒なまん丸い石が灰色の母岩の中に作られているのも、不思議と言えば全く不思議なことです。

また、石の中に空洞があり、そ

こに別の石が入っていて振ると軽い音のする鈴石と称するものがあります。

その他いろいろな奇しき石がありますが、よくよく見ると、すべて超人間的な「單純・正確」という特徴をそなえています。この單純正確さに、われわれ、はからいと迷いに慣れ切つている人間は畏敬ともいふべき感動を覚えるのだと思ひます。

人間業でなければできないと思ふような正確な営みが、ある条件の下では全く当然のこととして自然に行なわれる、ということに氣づかされた時、地球という自然の絶大な威力を感じざるを得ないのです。——こつ言つただけでは正しくありません。やはりこの奇石

群から受ける威力は、人工の即席とは異なって、幾千万とか何億という年数を経て現象した物のもつ一種靈的とでも言うべきものかも知れません。ともかく悠久のいのちの軌跡の集積をそこに見る思いがするのです。

私は今までにも珍しい石を多少は見ています。そして何となくそのようなものを軽蔑する気持ちがありました。それはその珍しさは偶然の所産であるような気がしていたからです。切手や紙幣の蒐集家が、偶然出来た不完全品をやらに珍重するバカらしさに似た感じがしていたのです。

ところが統一的意図の下に集められたと思われるこの奇石のコレクションを見るに及んで、珍石銘

石とは全く異なる畏敬の気持ちを経験したのです。先にも述べたように私は普通の石にも岩にも深い親しみをもっていました。しかし、この奇石群に接してはじめて岩石に対する新たな眼が開かれ、一般の岩石への愛情にも一段の深みを加えたのです。これは近来にない大きなよろこびでした。

因にその奇石博物館は、静岡県富士宮市天母台あんどだいというところにあります。富士山麓、緩かな南斜面の広大な樹海の中の、人里遠く離れた場所に広い敷地を占め、手入れの行き届いた公園風の中に設けられた小博物館です。まだあまり世間に知られていないとみえ、平日は訪れる人も稀です。興味のある人はあまり混み合わないうちに

訪れてゆっくりと觀賞するのがよいでしょう。



まみず

昭和四十八年
十月号

やま 10

野心と願い

白い杖 33

野性味

和田 重正

(小田原はじめ塾)

オレが儲けよう、オレが出世しよう、オレが名を売ろう、
オレが尊敬されよう——これが野心。

このオレがなく、己の損得を離れてよいことの実現を図る
のが願い。

野心はどんなにスケールが大きくてもケチな根性に違いな
い。天下を狙う野心も卑劣なケチ。

事からは小さくとも願いは重く偉大である。

野心も願いも空想と違つところがある。実現を図るか否か
がその違いだ。

一、合宿点景

○木登り

われわれの山の合宿所(一心寮)のまわりには、杉やもみじをはじめいろいろな大木が茂っています。そこへ小学生でも中学生でも連れて行くと、子どもたちは、暇さえあれば木に登ります。そして誰に教えられなくても登り心地のよい木は本能的にわかるとみえて、どのグループでも最初に登りはじめる木は

きまっています。それからだんだんにむずかしい木、高い木などの征服に発展して行きます。

昔はあまりなかったことです。が近頃は女の子も男の子に負けずに登ります。先日など、女の子が二人で裏の公孫樹の大木のテツペン近くまで登っているではありませんか。時々夕方薄暗くなつてから大木の下を通ると、上の方でガサガサ音がします。

よく見ると人間の子どもがこちらの幹、あちらの枝にとくっついていきます。その有様は、猿が木に成っているのと全く同じです。これを見ると人間の子どもの木登り好きは、遠い祖先の習性の名残りではないかという気がしてきます。木登りは極めて

原始的な本能的欲求なのかも知れません。この欲求の満足は、子どもの成長にとつてどんな意味をもつのかわかりませんが、ともかくある重要な何かであることは間違いないと思います。多勢の子どもを見てみると、木登りの好きな子は、そうでない子に比べて何か一種の頼もしいものを持つているような感じがしてきます。

木登りには危険が全く伴わないとは言えません。その危険を承知で私は放っておきます。木登りにはその危険を冒すだけの価値があると私は思っているからです。

○ラグビー・モッコ

モッコとは何のことかわかり

ませんが、一心寮に来る男の若者たちが好んでやる、ルールなしのメチャクチャラグビーを彼等はラグビー・モッコと称しています。恐らくゴッコなどと言うナマヤサシイものではない、という感じを表わすのに自然にできた言葉だと思えます。

男の高校生や大学生が十人以上集まると、これをやらなければ山を下りられない様子です。それほど彼等にとつては魅力的な遊びなのでしょう。

ともかく、ひどいものです。トライをするゴールがきまっているだけで、グラウンドの範囲さえきまっていないのです。一心寮所属の運動場ばかりでなく、その隣接の草原にまで走り込んで、

そこで、折り重なって取組み合
いをしていきます。スキの切り
株などの所でやられると、どん
な怪我をするかと思つて、見て
いる方が気が気ではありません。
ルーズスクラムになると下敷き
になっている者の脚を引つ張つ
てズルズルと引き出します。当
然腹や背中が地面にこすれてカ
スリキズだらけになり、かなり
血の出ることもあります。むろ
んズボンもシャツも泥だらけ、
しばしばビリビリにもなります。
汗と泥にまみれて引き上げて来
た連中が、風呂に入つて痛むカ
スリキズヒリヒリは、彼らにと
つては快感なのかもしれません。
これはまことに壮烈な遊びです。
母親は勿論、父親でも若い時に

この類の乱暴を経験したこと
のない人は、わが子のラグビー・
モッコはとも見ていられない
でしょう。それほど壮烈なもので
す。これによつてケガ人が出ない
という保証はありません。殊に全
力をあげて飛び込むことができ
なくてこわこわやっている気の
弱い者には、かなり危険な機会
が多いはずだと思えます。(幸い、
これが始まつてからの四、五年
間に、一度も大きなケガ人は出
ていませんが)ともかく、あの
劇しいぶつかり合いの中では少
しも気の迷いや躊躇があつた
ら、アブナイのは事実です。
しかし私はある程度の危険を承
知でこれを黙認しています。敢
えて禁止しようとは思いません。

それはこの遊びはそれだけの危
険を冒すに十分な意味と価値が
あると思つているからです。

○山中、夜中の歌声

明日はいよいよ一週間の合宿
が終わつて山を下るといふ前の
晩のことです。指導者たちの要
請によつて、私は八時から一時
間の予定で「思いやり」という題
で中学生たちに話をはじめまし
た。しかし十五分か二十分話し
ているうちに、あちらでもここ
らでも居眠りがはじまりました。
無理ありません。朝五時に起
きてから一分の休みもなく、動
き通して一日を過こしてきたの
です。中でも朝の掃除、自由時
間のボール遊び、午後の畑仕事
などはかなりな運動量です。そ

して夕飯を食べ、お風呂に入つて此処に坐つたのですから睡魔に襲われるのは当たり前です。がまんしろという方が無理です。

この有様を見て私は三十分位で話をやめました。そして「みんな今晚は早くやすみなさい」と言つて下の家の自分の部屋に行つて早目に床につきました。

しばらく眠つてからフト気がついてみると、上の畑のあたりに人声がして、時々二、三人ずつの足音が聞こえてきます。

「今頃なんだろう？」と思つて耳を澄ましてみると、神社の方のかなり高い所から、時々誰かの声が聞こえて来ます。時計を見ると十時を過ぎています。あんなに眠かつた連中が、話が終

わると同時に急に活々として、この真暗な山の中に入つて行つたらしい。きつと自発的に——肝試しをはじめたのだらう。

ずつと高い神社のあたりからも声がして来る、途中の樺のあたりで女の子がキーという声を出している。お地藏さんあたりには幾人かが集まつて大声で何かを話し合つてゐるらしい。そのうち大きい男の子らしいのがすぐ上の道をドスドスと走つて上の家の方へ走つて行つた。

だんだん暗闇の山は興奮に包まれてきたようだ。遠く近くの声が高くなり、悲鳴や笑い声が多くなつて来た。——私は寢床の中でその気配をじつと受け取つ

て、喜びが心の深いところから静かに、しかし大きな圧力を以つて湧き上がり、全身を押し包んで来るのを身じろぎもせず堪えていました。

そのうち運動場のあたりで女の子が二人で歌いはじめました。なんのためらいもない声を張り上げて歌うのです。

「ウララ、ウララ、ウラウラウ
ララ……………」

こんな歌があるのかどうか知りません。多分デタラメに興に乗つて声を出しているに過ぎないのでしよう。それでもその歌声の幸福さうなこと。生の喜びを——春に目覚めたばかりのコジユケイと同じような生の喜びを奏でているのです。こんな美し

い歌がこの世にあるだろうか。

私は闇の中から聞こえて来るその歌声を一滴もこぼさぬように魂の奥深くに取り入れ、しまい込みました。

この山では、どんな夜中に、どんな声を出しても誰も心配してくれる者はありません。人里近くだったら、この時刻に、この奇声を発したら恐らく急救車とパトカーが駆けつけるに違いありません。世間から隔離されて、思う存分に野性を発揮さすことのできる場所が与えられたことを、私はどんなに有難く思ったか知れません。どこへ向かってこの大きな感謝を捧げたいのだろう。

二、デカンシヨの原始性

話変わって、左の一文は今から二十五年位前に書いた小冊子「人間のための教育」の中の一節です。

デカンシヨくで半年暮らせ

コリヤ〜

あとの半年や寝て暮らせ

ヨ〜イ〜 デッカシヨ

デカンシヨ歌えば教師がおこる

コリヤ〜

おこる教師の子が歌う

ヨ〜イ〜 デッカシヨ

酒はのめのめ茶釜でわかせ

コリヤ〜

おやし質に置いて酒をのめ

ヨ〜イ〜 デッカシヨ

このような言語道断破廉恥極まる文句をあらん限りの蛮声を張り上げて歌ったあのデカンシヨである。道学者をして脳出血を起こさしめるに足る暴言であると同時に合理主義とエチケツトを身につけた文化人をして言いようもなき軽蔑の念を起こさしめる野蛮さである。もしデカンシヨ嵩じて夜半のストームにまで展開して行つたならば、正常なる常識人にとつても解き難き謎となるであろう。まして寮雨においておや。

あれはまことに慎み深きジェントルマンの所業ではない。当時に於ても幾度か反省の聲が聞かれたほどである。

しかも——大正年間ほど華やかではなかったとしても——ともか

く旧制高校の存続する限りはデカ
ンシヨの蛮行は、その伝統を断た
なかつたようである。

あれ程どの点からみても非難さ
るべき野蛮な行いが三、四十年も
の伝統を保つことができ、しかも
今尚多くの人々からほほえみを以
つて観られているという事実は何
を意味するのらう。

私はその蛮行をなつかしむので
はない。その不道德な言辭を貴ぶ
でもない。私はあの善悪以前の
赤裸々なるいのちの躍動を何もの
にもまして美しいものだと思ふ。
もし旧制帝大卒業者が他の大学
専門学校卒業者に比して異なるこ
ろがあるとするれば、知識の多寡
でもない。技術の優劣でも、まし
て道義心の堅固さの多少でもない。

只一つ人間のゆとりの点にあると
思ふ。もしこれが正しいとするば、
それはあの寮生活の功であり、寮
生活の中に脈々と生きていたあの
デカンシヨの原始性に帰せらるべ
きだと思ふ。

私は今日の青少年が虫気のある
幼児のようにみじめに見えて仕様
がない。わがままでいじけている。
彼等にデカンシヨの原始性を發揮

する場所を持たせてやりたい。そ
して彼等と世間との接触面に自ら
防壁となつて立つてやりたい。も
つともらしい粧をかなぐり捨てて、
生のいのちの咆哮乱舞を一度は彼
等に味わわせてやりたい。立ちど
ころに虫気はおさまるらう。

われわれはわれわれの若者達を、
抜目のない小使や小賢しい事務員

ばかりにしたくないのだ。小手先
の器用な利口バカにしたくないの
だ。愛する日本を自ら経営し、育
つてゆくにふさわしい強靱な自主
性をこのデカンシヨの原始性の中
から汲み出してゆこうとするので
ある。

三、野性を惜しむ

戦後日本復興の大スローガンと
して文化国家の建設が掲げられま
した。もう戦争はコリゴリだ。あ
の荒っぽい、血も涙もない軍国主
義の悪夢は速かに忘れて、文化の
花咲く平和日本を実現しよう。と
叫ばれました。みんな賛成しまし
た。そして官民こぞって文化の発
展のために努力してきました。勿
論教育もそのスローガンに従つて

組み立てられ、その国家目標達成のために全力を尽くしてきました。

その中であって、天の邪鬼の私はこんなことを思っていました。

文化、文化と文化にばかりウツツをぬかしていると骨なしの柔弱者ばかりできてしまうだろう。文化も結構だが、生命力溢れる野性を失わせない工夫もしなければならぬ、と。

それで私はデカンショ的原始性と称する野性の温存のために東泉院というお寺を借りて塾生の合宿をはじめました。当時そのお寺は戦時中学童疎開の受け入れですっかり荒れ果てていたのです、かなり気兼ねなく子どもたちの野性回復に役立つように使わせてもらおうとができました。しかし、そのう

ちに世の中が回復して来るに従って、このお寺もだんだん整頓されてきて「常規」が要求され、子ども

の野性回復の場としては遠慮しなければならなくなりました。こうなるとは合宿も意味がなくなるばかりでなく、かえって弊害の方が多くなります。こういうわけで、お寺の合宿は断念しました。そしてマゴマゴしているうちに偶然、

山の合宿所が与えられ、最初に述べたような理想的な野性回復の場となったわけでありませぬ。

私は、野性とは何か、とか何故野性がそれほど大事なのか、など理屈はよくわかりませぬ。

しかし、人間にとって野性は、もしかすると文化より大切なので

はないかときえ思えるのです。野

性は野蛮とは違います。しかし野

蛮の中には野性が共存している場

合も多くあるでしょう。ともかく

野性とは文化の反対概念であるこ

とは間違いないと思います。です

から、野性的文化ということばは

成り立ちませぬ。しかし、野性と

文化とは何時までも共存しなければ

ならないと思います。それでな

かったら人間は文化のために滅び

勇力の男子は勇力に斃れ

文明の才子は文明に酔う

君に勧む

^{すべから}須く中庸を扱ひ去くべし

天下の方機一誠に存す

(中庸 元田東野)



不安の中の自己発見

今年八月十一日から十七日まで六泊七日の“まみず学苑”夏季合宿は、例年のように、西丹沢一心寮で催されました。参加者は四十六名（内全体参加二十名）で、学苑創立以来の多人数でした。これは、今回のテーマ“現代の不安”もさることながら、今日の社会に生きる若者の内面の深い苛立ちとそれを克服したいという強い願いを物語るものではないでしょうか。というのは、テーマこそ年々変わっておりますが、“まみず学苑”合宿の根本目的は、若い方々に“今、ここで最高に生きる”生活を学んでいただきたい、という趣旨が、ようやく認識されてきたためではないかと思えます。それだけに、合宿の世話人のご苦労は、また大へんでした。ことに今年からは、若者たちの自主運営におまかせしましたので、なおさらです。ここに六人の合宿感想文をご覧いただく前に皆様とともに、世話人の方々に、“本当にご苦労様”と申し上げたいと思います。

昭和四十八年十月

まみず学苑

合宿感想文

想い出すままに

名古屋 中山真知子

山北駅に着いた時は和田先生のお顔をしか目に入らなかつた。本当にうれしかつた。

山北駅から一心寮まで歩いた途中で、わき水をおなかいっぱいのんだこと。おいしかつた。

・草とり

一週間の合宿で一番楽しかつた。どうしてかはわからないけれども、家に帰ってから、自分が草をとっていた姿を想いだすと、何とも言えないやすらいだ気持になるのである。

・ほうき競走

和田先生、平澤さん、大野さん e.t.c. 皆上手なのにはびっくり。

私は落としてばかり。

・チャビンの鳴き声

一番最初の正座の時のたすけ舟だつたのがチャビンの鳴き声。

和田先生曰く。

「中学生もたすかつたと言いますよ」

・正坐

足が痛くて仕方がなかつたけれども、和田先生が、

「痛くても痛いままで座っていてください」

と言われたので、よし、どんなことがあつても動くものかという気持ちで座っていた。が、

「はい、静かにやめて」

という先生の声を聞いた時はホツとした。

五日目の朝が一番辛くて、はやく終わらないかと思つた。

・おこげのごはん

薪で炊いたごはんはおいしいのです。おいしいので食欲もでて、どんぶり一杯の他に、おかわりをしたのです。よく食へ、よくあそび、そしてよく食へ、のくりかえし。結果は体重計の針のみぞ知る。

・まみず合唱団

山中さんの指揮で歌つた

「夏の日の想い出」

神社の石段に座つて、みな、声をそろえて大きな声で気持ちがよかつた。

・演芸会

富永先生の自作の歌三曲。目を
つぶって聞いたので先生の表情が
わからず残念。大江さんの詩の朗
読。松原さんの踊り等。

・花井さんが、愛川のポンコツ（失
礼！）自転車で夜道を帰ってい
かされたこと。みな心配で、本当に心
から無事を祈ったのです。

・林さんの作った、三個分は軽く

ある特々大のおにぎり

・ほうずきがなっていたこと

・道々に白い百合が咲いていたこと

・神社に紙きり虫がいたこと

・蟻地獄がいっぱいあったこと

・キャンプファイヤー

すばらしい月夜でした。和田先
生が、こわい本当の話をしてくだ
さった。聞いている時も少しこわ

かったけれども、家に帰ってから
その話を思い出すと、障子にうつ
った人影を想像してしまつて、夜
になるとどうもこわいのです。

・肝だめし

キャンプファイヤーが終わつて
から希望者数名で神社まで胆だめ
しに行つて、あとからくる人たち
を木かげにかくれてびっくりさ
せた。

松原さたち女性三名の「ギャー」
という声があたり一面にひびきわ
たったのです。

帰りは三分間隔で一人ずつおり
ることになって、どういうわけか
私が一番になつてしまい、こわご
わながらも、どうにか一心寮まで
もどつてきました。うしろをふり
かえつた時はぞつとしてしまいま

した。だから足もとだけを見て、
早足でおりてきました。

・柏木さんの最新作の絵を見せて
いただいた

心の中がスーとするような山の
絵でした。

まだまだ他にもたくさん楽しい
ことがあつたと思います。

この合宿に一週間参加して思つ
たことは、みんな初めて会う人ば
かりなのに、少しもそんな気がし
なかつたこと。自分を素直にだせ
たこと。そして、こんなに気持ち
がやすらいだことはなかつたよう
な気がするのです。丹沢の山々に
囲まれた自然の中にいたというこ
ともさることながら、何よりも、
和田先生のあのすばらしい笑顔の
せいのような気がしてしかたがな

いのです。今でも目をつむれば、すぐ先生の笑顔が浮んできてうれしくなります。

先生のお話の中で、

「全体の中で、各々が、各々の役割をもって存在していて、どんな人をも、愛しいと思わずにはいられません」

ということを言われた時、背中にしょっていた荷物が急に軽くなったような、余分な荷物に気がついたような、そんな気持ちになり、私は私の役割を果そうと思うと同時に、先生の絶対的な愛を強く心に感じました。

先生に接したら、どんな人でも自分を全部だせるのではないかと思えます。

決して、おしつけがましい話し

方をされず、まるで、川の水が流れるような話し方です。うっかりしていると、大事な言葉もあつというまに流れていってしまっていました。

事實は事実として認めること。

先入観で、ものを見ない。祈りと願いをもって生活していれば必ず運が開けてきます。etc…

先生の言葉は、自分はダメな人間ではない、まだまだこれからだ、あせらなくてもだいじょうぶだ、と心から思えるようなことばかりで、力が湧いてきて、生き生きしてくるのです。

楽しいことばかりだったけれど残念だったことが二つあります。一つは、ほんとうによい月夜だったのに、空気が悪くてタヌ

キの腹鼓がきかれなかったこと。一つは、先生に直接触れることができなかったこと。要するに先生と握手がしたかったのです。

では、皆さん風邪などひかないように気をつけて下さい。

いい加減なことでは通じない

東京 稲田 健

今回の合宿のテーマは、「現代の不安」であった。元来鈍感なぼくには、ぴーんとくるものがない。それだけに漠然とした気持ちで、とにかく参加してみた。ぼくのネライとしては、一心寮での生活をおくることを楽しみたかったし、

事実その感じがつよかった。反応のにぶい自分にとって、全体参加は非常によかったと思う。というのは自分なりにいろいろなこと、気がついたからだ。

人に対して真剣に話すようなものを持っていないぼくのような雑な人間が、本当に真剣な人たちにまじっている場ちがいさ、つまり自分の感受性のよわさに対しての劣等感に気付いた。その反面つきまとう優越感。それらの原因がどこにあるのだろうかということにもある程度気付いた。感受性のよわさを問題にする前に、「人の話をよくきかない」という事実。これは、最後の「きちんと坐る」のときの和田先生の話ではつきり感じた。そして「その他グループ」で同じ

であった西谷先生の人の話をきく態度からもその感をうけた。かなり自分はいいい加減にきいている。そしてもうひとつ大きな原因に、

人の話をよくきかないくせに、他人によく思われたというケチな欲望から相手の思惑や顔色を窺いながら、上調子に相ざちを打つ面があることも気付かされた。人の顔色や思惑をみながら、自分の判断を決定することは、実際すこぶる卑怯なことだと強く思った。合宿の最後の方では、自分自身がイヤになった。

全体参加してはじめて気が付いたことだけれども、一心寮での一週間という短い生活の中で、かなり心が流動的に変化するものだなあという感じをうけた。

一心寮の生活の中で毎日気が付かされることに、不慣れた生活の中で不慣れた炊事や作業によって、

なれないながらに工夫をしなければならぬということ、いい加減なことでは通じないということがあった。例えば花井さんなんかと、折れたナタの柄のはさまっている部分をぬくの、近くにあって薪の棒をそこにあてて金槌でうったりしたがぬけなかった。ところが、そばで風呂工事をしていたおじさんが、同じことをボルトの長い奴でやれば、あっという間にとれてしまった。その時、頭をつかわなければダメだなと思った。ぼくなんかは、一心寮で生活していると体はつかれても、心の方は非常におちつき楽になる。でも

その楽な気持ちだが、世話人の人たちの負担の上になりたっている。

世話人の人たちは本当に身心ともに疲れるらしい。合宿生活を楽しく有意義にしようとする向きにとりくんでいるためだと思ふ。

参加者の方は、どうも、世話人の負担の上で受身的になっていくようだ。その他グループの話合いの中でもでてきたけれど、一心寮にみんなが集まってきて、その日からどうやってこの生活をおくっていくかという無計画の計画みたいな合宿生活をやったらどうだろうという話もでてきた。生活がおちつくのに二、三日はかかるかもしれないが、やってみたいなあと思つた。

その他グループの中ででてきた

組織（団体）内での個人のあり方という問題は、非常に興味深い。社会にでたらすぐさま痛切な問題になるだろうと思ふ。

最後の日の朝、神社で、和田先生がなぜ一心寮に日の丸をかかげているのかという話をした。今回の合宿では、ほとんど和田先生の話もきかなかつたし前半の全体会ではどうも話にのっていけなかつただけに、神社での話が自然と身体の中に伝わってきた。だけれども、どうして先生は、あんなにも時を移さずしみいる話ができるのだろうかと、不思議に思つた。

今回の合宿でいろいろな人たちと知りあえ、そしていろいろなことにも気付かされ有意義な一週間をおくられてうれしかった。

本当に全体参加してみてもよかつたと思つている。

「葦かび……」後
十年目を迎えて

東京 伊藤 恵子

東京駅に着き、連絡通路を歩いていると、もう面相の険しい(?)人、人の流れ。わたしはその流れの間をぬって歩く、例の感覚を取り戻すのにひと苦労。東京は水不足が深刻になりつつあり、残暑のきびしさもここ当分続きそう。

今、こうして原稿を書いていても、あの一週間の一心寮での合宿生活が懐しくてたまらない。皆さ

んはいかがお過ごしですか。

それにしても一週間、よくもまじめに、そして気持よく話し合いをしたものです。あの豊かな自然と、途中のケチ落としの谷にケチな根性を捨ててきた人々が作り出す雰囲気のせいでしょうか、コミュニケーションも率直に行なわれるような気がしました。

不思議な出会いで、「葦かび…」以来、約十年目に和田先生にお目にかかることができました。つくづく思うに、「葦かび…」の本は、わたしという土壤に、素晴らしいと同時に、エラクやっかいな種を植えつけてくれたものだと思います。芽を出した種は、和田先生というお陽さまとちょっとお別れしている間に、四方八方に無駄な枝を伸

ばして、あまり、まっすぐには伸びてこなかったようです。でも再びお会いしたときの嬉しさといったら、何ともしようがありませんでした。そして合宿の間は、ずっと先生を身近な方に感じるこゝとができました。それまで、和田先生は、わたしには大先生で、おそばにいたら、何を言ったらいいのだろうなどと心配でしたが、そんな心配はすぐに消し飛んで、先生と並んで草取りなどをしながら、楽しいおしゃべりの時間も持てました。

ところで、あのイチゴの苗はうまくついたでしょうか、気がかりです。来年の五月ごろには、たくさんの実がなっているといいですねえ。一心寮は、いのちの洗たく

にはもってこいの場所です。これからもたびたびお邪魔することにしたしましょう。

世の中全体が一心寮だ

東京 鈴木 庫明

午後八時頃に、一心寮に到着したのが、私、鈴木庫明です。そうです、私は一人で、否、もの言わぬだれかといっしょだった時もあったかもしれません——和田先生の幽霊の話の余波——とにかく夜の山道を歩いて一心寮に到着しました。

「どうしてこんな時間に来てしまったのか」

「明日の電車に乗ればよかった」などと、もう一人の自分と相談しながら、山北の夜道を歩きはじめた時は、実に心細かったこと、はじめの土地であつたので、またまた心細くて、「おかあきーん」という心境でした。箱根には近いが、途中に山賊や雲助が出没するなどの注意が地図になかったのが、大きな力となつたのか、山道に入つても気持ちよく歩きました。

途中、秋田犬のニメートル位もあるのに、ほえられたり、とびつかれたりしましたが、それはそれ、内山先生の「泣き笑いの托鉢」と「私のヘッポコ新米禪」のおかげで窮地を脱し、おまけに、その犬と友達にまでなりました。ワン君を伴に、意気揚々として市間まで、

そこでワン君は御帰宅、私はまた一人で、否、だれかといっしょだったかもしれませんが——幽霊の話の余波——とにかく、一路、一心寮へ……。

山賊にも雲助にも、まむしにも出会わず、また、「動物も人間もさびしがりやで、みな、いっしょに生活しなければ生きていけない」という尊い教訓までもらつて、私は山道にわかれを告げ、一心寮に到着しました。

『ケチ落としの谷』アツ、ケチを落とすわすれて持つて来てしまつた」と、寢床に着きながら溜息。その溜息あとあとまで響いて一心寮生活中、溜息の連続——「なんとこの人間はケチなんだろう」と、もう一人の自分が私に向かつて叫

ぶこと数回——。

和田先生のお顔を見るたびに、「机は木で作られているが、その木は、くりやラワンの木からできているゾ」という天の声が聞こえてきました。

『スマレはスマレの花が咲く』言葉だけ知っていて、否、意味だつて知っていたが、今、ほんどうの意味がわかつた」と思った時、「おまえは世界一のバカさ」と、もう一人の自分が私に叫びかけていました——本当に私はバカだ——。帰路、「ケチ、ケチ、ケチ、谷川の水になつて水蒸気になつて、空のぼつて、こんど地上にくる時は、みんなのケチを清め流す雨になれ」と思いながら、ケチ落としの谷から、上りの分と下りの分の

ケチをまとめて落としました。だけれども、しばらくしての小田原への車中で、「落としたケチより数倍ものケチが私のからだのどこかに埋蔵されている」などと思っと思いますと、「世の中全体が一心寮だと思っって生活しなさい」と天の声がやさしく教えてくれました。

今は只、もう一度一心寮へ出かけてみたいと思っっています。

追加—— 高杉部落と柏樹社の社長さ

んと一心寮にかけて、幕末の

志士高杉晋作の短歌を詠しま

す。この歌は、沢木興道老師

の御著書か何かに、人生その

ものを歌った、すばらしい歌

だとして掲載されました。

道を教えて下さった部落の人

たち。柏樹社の人たち、和田

先生、和田先生の奥さん、合宿の参加者たち、とりわけ、私のくだらない「理屈の話の

屁理屈」を聞いて下さった人

たち、みんな耳を澄まして聴

いて下さい、これから吟詠し

ますよオー、では、御礼の意

味を込めて。アッ、それから

演芸会に出演しなかったかわ

りに、では

面白く、なき世の中を 面白く

生きるは 人の心なりけり

新しい自分を発見して

名古屋 大野ユキコ

今回は途中参加のためか仲々溶

け込めず、初めはいらいらしていたのですが、最終日近くになると、やはりいつもと同じように楽しい

合宿になっていました。その中で

考えたことは、合宿に参加した人

達にはニグループあったというこ

とでした。

一つは和田先生に相談したい人。

もう一つは、ここに集まって来る

人たちはみな大体同じような考え

の人たちですから、そういう人た

ちと一人でも多く接触し、語り合

う合宿をしたいという人。

大部分の人は最初の方だったと

思いますが、私はもう一つの方の

考えで出席したのです。そういう

点からいって。私は今回も多くの

人と知り合い、語り合うことが出

来、満足のいく合宿であったと思

っています。

また、今回思ったことは、私自身が随分落ち付いて来たなということでした。それは何故かというと、合宿に参加している人たち一人一人を客観的に見ている自分に気が付いたからです。こんなことは今迄とても出来なかったことです。そういう広い心でいたせいか、今回自然の美しさにひかれたこともありませんでした。

右手少し上に宵の明星が輝き、うつつらと光を放っている山合から出てくる月。その明るさに心をとぎめかし、あたりの静けさをしみじみと感じたものでした。また、抜けるような空の青さにひかれ、富士を見に行き、草の上に寝そべり返り、流れる雲の様を見、風に

揺れる草の素直さにみとれたり、

自然の中にも生きている自分をつくづく感じました。

では合宿中はみないことばかりであったかというところうっかりでもないのです。一人で山北から歩いてきた時、木々や爽やかな風に吹かれながらも、いやだな、もう少し時間を遅らせればよかったかしらとケチな根性を持って登っていたのですから。それは、私が一心寮へ着く予定時間は三時半。そうすると、すぐに作業の時間で、休む暇がないということでした。「もう何回一心寮へ登っているの?」「これで四回目、ケチ落としの谷でもう三回もケチを落としたはずなのに、帰る度にまた拾ってくる

のだね」

こんな問答が何度も何度も頭の中で繰り返されたのでした。そこでの私の慰めは、そういうケチな根性を持ちながらも、行動することはいいことだという和田先生のお言葉でした。この慰めなくしては、とても一心寮へは登れなかったと思っています。

この様に、自分を恥じたり、びくびくしたりせず、あまり気負わない自分を見出しかけることが出来たことはとても嬉しいことでした。それだけ私が歳を経た(?)のかも知れませんが、それでもそのような新しい自分を発見出来たことは、本当に嬉しいことです。また、次回も参加し、一人でも多くの人と語り合いたいと思っ

ています。

多かつた

「だしおしみ」の精神

神戸市 西谷 行雄

この合宿に大変な期待を寄せていたことは参加するまでの心の動きを見ればよくわかる。この合宿があるという聞いてからは、この休み中の合宿はこれ一本にしぼった。参加したい合宿が同じ時期に三つもあり、それらは、僕にとつてかなり大切なものであった。(京阪神まみず会の接心・大阪・神戸合同カウソセリングワークシヨップ・箱庭研究会) どうしてまみず学

苑の合宿に大きな期待をしたのか不思議である。主題には、そう関心を持っていく訳でもなかった。とにかく参加したいというだけであつた。

感想を書くことになっているので、参加するまでの期待が満足されたかをおもいかえてみると、全く満足されていないのである。その責任は僕にあることだけは確かである。

そもそも一週間もの合宿では、理論的發展を重視するよりも、討論、清掃・食事・風呂等の当番、作業、自由時間などの接触で、私たちはみな兄弟姉妹なんだ、みんな一つのものによつて造りだされたものである、というようなことを実感することではなからうか。

この点から見ると、僕には、そう実感できていないのである。このことは、僕にすべて責任があることであつて誰の責任でもないのである。

多くの方が和田先生のお話を聞き、その中で学びたいという姿勢であつたようにおもふ。先生の豊かな人生経験を語っていただき、明日からの生活の指針としたいと願うのは当然であるし、真理を悟つた方の話を純粹な気持ちで聞くことは、真清水を求めようとする者にとつて欠くべからざる態度でもある。

僕としては、長期の合宿の場合には、参加者全員が、討論の中で、とにかく言いたいことをいい、自分のおもつていること、その場で

感じたことを言ってしまう。つまり、自分を出しきってみることがもっとも大切なことだとおもえるのです。この点からみると、多くの方々が「だしおしみ」をされているのではないかと推測するのです。他人様のことは、わからないが、僕自身は、討論だけでなく、合宿期間中すべての面でだしおしみしているように感じていました。そんな気がしながら、そうしか動くことの出来ない僕自身が問題ということに苦痛なまで知らされたのです。そうして、この出しおしみは、実は、合宿期間中だけでなく、日常生活でも、常に体験しているということにも気がついたのです。和田先生のおっしゃる「ケチな根性」で毎日生活しているこ

とを本当にイヤになる程味わったのでした。

何か言いわけを書いているみたいで申し訳なく思います。一心寮へ行つて良かったということにはちがいはないのです。満足感がなかったということは、そのまま駄目だということではないのです。

後記

今号のみみず学苑合宿感想文の一つ一つにも、参加者のこの合宿にかける思い、そして和田先生を含めた一心寮の雰囲気がよく出ているなあと思います。あるとき地球という星に咲いたかけがえのない花、それが「みみず」であり、この合宿であった。そんな思いを強くします。

柏樹社、中山社長の取り組みに、改めて感謝の思いいっぱいです。

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第83号

令和6年10月1日 発行

発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分けします(有料)
◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇